ぐんまシルク紀行

機織りの神へ多額の寄進

青銅製燈籠（富岡市）

高さ約４㍍の一対の青銅製の燈籠が、富岡市の妙義神社と貫前神社にある。ともに幕末に糸繭商人や養蚕農家などが寄付し、相次いで建てられた。費用は約千両。富岡製糸場ができる前のことだ。

妙義山麓の妙義神社の燈籠は、総門をくぐったところにあった。

「金五拾両　野沢屋惣兵衛　金弐拾五両　不入屋治平」。石の台座の上の基部にこんな文字が刻まれている。寄付者２２３人の氏名と金額で、総額は１１５８両。県内の養蚕関係者のほか、惣兵衛ら横浜の生糸貿易商もいる。

山そのものがご神体で、養蚕と直接関係ないが、燈籠の真ん中辺りに「養蚕倍盛　商売繁栄」の文字もある。「養蚕業の永続を祈願して神輿を奉納し、さらに燈籠の建立を思い立ったようです」と宮司の川島邦夫さん(64)。１８６３年晩秋に発起し、64年6月に完成。当時の勢いを感じさせる。

上野国で最も社格が高いとされる一之宮の貫前神社の燈籠は総門の前にある。燈籠には小さな文字で名前と金額がびっしり。１５４４人で、総額４７９０両だ。

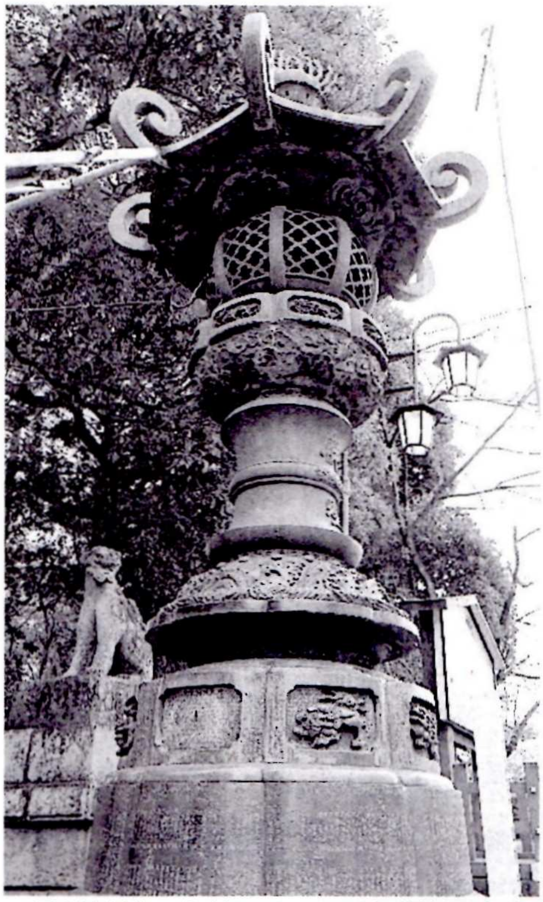
富岡製糸場で働いた工女、和田英の回想録「富岡日記」に神社の記述がある。富岡製糸場世界遺産伝道師協会の井上雄二さん(69)は「日曜日にしばしばお参りし、糸取りが上達するよう祈ったそうです」と解説する。

ただ、地域で親しまれていただけでは、これほどの寄付は集まらない。宮司の小林冨士夫さん(55)は「一之宮であることに加え、御祭神の姫大神が養蚕機織の神だからでは」と話す。

中世の「神道集」に赤城神社の神が絹の機織りをした際、生糸が不足し、姫大神から借りたと書かれている。古来、養蚕が盛んだった証しだ。中国から養蚕技術を持ち込んだ渡来人が多く住む地域だったという説もあるそうだ。

貫前神社では養蚕関連の神事も受け継がれている。12月には拝殿で機を織り、1月には桑の弓とよもぎの矢で的を射て一年の水の量を占う。今年の水は「少ない。荒れる」と出たそうだ。

（長屋護）



貫前神社の燈籠。かつては「養蚕安全祭」も行われていた＝富岡市一ノ宮

唐獅子の彫刻の下に寄付者の居住地、名前、金額が刻まれている＝富岡市妙義町の妙義神社

青銅製燈籠　養蚕や製糸の繁栄を願い、1864年に妙義神社、66年に貫前神社、67年には八幡八幡宮（高崎市）でも建てられた。富岡市史などによると榛名神社（高崎市）にもあったという。妙義、貫前の燈籠は富岡市指定重要文化財となっている。